

真実明に帰命せよ

子供の眼は晴れている。そして真正面から、人の顔を見る。

然るに、大人は、その心が曇つて来て、まともに人を見得なくなる。特に、自分を一番よく知っている人の眼を。

生きている間に、色々な傷を心に受ける。その思い出が、その人の心を縛つて、自由自在に、朗らかに、明るく生きさせない。

如来の清浄真実の大悲は、この心を洗つて下さる。六字の中に流れる寂滅の光は、一切の纏縛てんばくを溶かして下さる。それだから信心の世界は、一心であり、光であり、懺悔であり、歓喜であるのだ。

真実なるものを真正面に見ること、それが宗教であり、信心である。

如来は一面沈黙者である。

沈黙者であるが故に、心が痺しびれていれば、人間よりも恐くない。しかし、その沈黙者が、何よりも明瞭にものを言う。ものを言わないのは、教を聞かないが故である。教を聞くとは、如来の聖なるみ心を、善知識を通して聞くのである。如来は、一切を審判する神でもなく、衆生を罰する神でもない。ただ一切を救う大慈悲であり、一切を生かす真実功德である。

しかし衆生が、教を通して、これを真正面に瞻仰する時、如来は衆生の心内の纏縛てんばくの綱を断ち切らないではおかない。破闇とは一切の疑いの闇を破ることであるが、それは、教えが一切を打破つて衆生心を清算せしめ、まともに久遠の真実を仰がせることである。

清算しきらないものが内にあれば、決してみ法が耳に入るものではない。心の弱い者は、種々の過去の心の傷が、悔いや恨みになって、悩みとなって、邪魔をなし、心を暗くするし、心臓の強い者は、悪に麻痺して、ずるずる生きて何ともなくなる。いくらでも如来の教をごまかしてゆけるようになる。はては、自己を、大衆を、仏法話でごまかして、笑わせたりして流れ渡るようになるのである。

南無は真実への開眼である。阿弥陀仏は真実そのものである。如来によって、如来に眼を開かれるが故に他力である。南無の機において、衆生は、如来の久遠の真実をまともに仰信するし、如来は、南無の世界において、衆生の上に久遠の真実を實現し、功德の実を廻向したまうのである。懺悔、慚愧は、こうした世界において起こつて来るのである。

父、頻婆娑羅王を七重の牢に殺し、母を深宮に幽閉した五逆の阿闍世王が、遂に、真実を仰ぎ見なければならぬ日が来た。

涅槃経（信巻御引用）に言く、

「爾の時に、王舎大城に阿闍世王あり、その性、弊悪にして喜んで殺戮を行ず、口の四悪を具し、貪、恚、愚痴にして、其の心熾盛なり。(乃至) 而るに眷族の為に現世に五欲の樂に貪著するが故に、父の王罪無きに横に逆害を加ふ、父を害するに困りて、己が心に悔熱を生ず。(乃至) 心悔熱するが故に、徧く体に瘡を生ず。その瘡臭く穢くして附近すべからず。」

痺れていた魂は蘇つて来た。瞋恚の炎の消えた時、そこに横たわつたものは、罪にさいなまされ、悔いによつて熱惱する痛ましい我が相であつた。その時、母の韋提希は、種々の藥を以て子の為に塗つたが、その瘡は遂に、増す分でも、治つては来ない。王すなわち母に白もく、「是の如きの瘡は、心より生じて、四大より起れるに非ず、若し衆生能く治すること有りと言はば、是の処あること無けん。」

こうした罪に泣く阿闍世に、外道の、理性さえくらまそうとする、因果撥無の法をいくら聞かしても、遂にますます苦惱が増すばかりであつた。そうして遂に、耆婆大臣によつて

「大王、諸仏世尊、常に是の言を説きたまはく、二の白法有り、能く衆生を救ふ。一には漸、二には愧なり。」

とて慚愧の徳の廣大なることを聞かされ、やがてその導きによつて、待ちかねたもう世尊のもとに至つた。世尊は月愛三昧の光、即ちその尊き証りより現われる人格の光によつて、その熱惱を安らかならしめたまい、やがて王の為に説法をなしたもうた。その説法の中に、

「殺も亦是の如し、有に非ず、無に非ずといえども、而かも亦是れ有なり、慚愧の人²は、則ち、非有と為す。無慚愧の者は、則ち、非無となす。」

尊き哉、慚愧の徳、怖るべき哉、無漸無愧。無慚愧の者は則ち非無となすとは、悪の果報を受けること、慚愧の人は則ち非有と為すとは、漸愧の人は、果報を受けぬことである。

慚愧とは、真実なるものの前に真に頭を下げることである。阿闍世には初め無自覚があつた、そして次には、悲痛な後悔、罪の責苦があつた。そしてそれが更に世尊の説法によつて深まつて来て徹底せる慚愧となつた。そしてそこに救いがあつた。彼は言つた。

「世尊、我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず。伊蘭より梅檀樹を生ずるを見ず、我今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子とは、我身是なり。梅檀樹とは、即ち是れ我が心の無根の信なり。無根とは、我初より如来を恭敬することを知らず、法、僧を信ぜず、是を無根と名く。世尊、我若し如来世尊に遇はずば、常に無量阿僧祇劫に於て、大地獄に在りて無量の苦を受くべし。

我今仏を見たてまつる。

是の見仏所得の功徳を以つて、衆生の煩惱悪心を破壊す。」と

「我今仏を見たてまつる」彼は、真実なるものを見たのである。大慈悲そのものに当面したのである。「我阿闍世が為に涅槃に入らず」とのたもう、還来穢国の大慈悲にあつたのである。それ故に迷いは破れたのである。

「我初より如来を恭敬することを知らず。」

「世尊、我若し如来世尊に遇はずば、当に無量阿僧祇劫に於て、大地獄に在りて無量の苦を受くべし。」

危い哉。衆生。「有に非ず、無に非ずと雖も」若し無量阿僧祇劫に於て大地獄に、無量の苦を受くれば「無に非ず」非無である。非無とは有である。果報を受くれば有である。然るに世尊の大悲は、懺悔、慚愧して遂に、如来に向かつて、合掌恭敬と、頭を下げる世界を廻施したもうた。無根の信！ 全くの無根の信である。

阿闍世はついに、真実なるものを真正面に拝むことが出来たのである。

真実なるものを無視するもの、それは救われない。多くの衆生がそれではあるが。真実なるものに恥じて顔をそむける者、それも救われない。

苦しくても、まばゆくても、真正面に、真実を仰げば、必ず内なる一切の縛着の綱を切つて、安らかにして下さる。

縛着の綱は、教を聞いて、自覚を通して切れてゆく。縛着を切るメスが、痛いところに触れることを嫌い、切らせずにおいて、お慈悲を喜ぶ世界は、煩惱の一時的気休めである。

感情が迷いを破るのではなくて、法門が智慧を成就して、迷いを破るのである。信心の智慧は、久遠の太陽を瞻仰する眼である。この眼のみが、我および人生の真相を知るのである。

気をつけて教えに聞き、世尊聖人の仰せの如く領解して歩ませて頂く気でも、世間は決して、誤解非難、攻撃の手をゆるめず、教えを聞かない者は、目こぼしに会つて赦されるのに、本気になつて歩めば、ますます人の眼的になる。

だが有難いことには、世間千万の眼よりも、如来聖人の眼が光る。それ故にこの一道を生き得るのである。

もし真に恐るべきことがあるならば、世尊聖人の教を無視し、如来大悲の真実を忘れて妄動することである。しかも常にこの恐るべき無慚愧をくり返している。

仰ぐべし、久遠の真実。そこにのみ、無根の信が光る。そこにのみ安らぎがある。そこにのみ、向上がある。そこにのみ一道がある。精進がある。龍樹は十二礼に、「瞻仰尊顔常恭敬」という。聖人は「真実明に帰命せよ」と仰せられる。真実明を仰ぎ得る日、汝は真に安らかであろう。